は享保五年から後れること二十二年、寛保二戌年（一七四二）十一月のもので、天保十三寅年十月改写されたものである。

在浦大小百姓漁師下人等江切支丹宗門儀累御制

として五十七頁にわたり五十二條の掟があげられ、其の表紙裏の最初に切支丹宗門儀累御制と、おなじく五人組帳五十二ヶ条全部が切支丹禁制の掟の様な印象をうけるが、切支丹関係の條目は最初の二ヶ條で、即ち

一 従公儀前々被仰出候御法度之趣弥堅相守之在浦大小百姓漁師下人等に至迄御制法少茂相背申間敷候事

一 切支丹宗門之儀累年御制禁之通堅相守五人組切常々心を附不審成者有之ハ早速可注進之若隠置他所より於顕に其庄屋五人組ハ勿論一類共に急度厳科可被仰付候然而御法度之不受不施非吏之法花宗相改之毎年二月中可差出之勿論前々之通切支丹宗門に而無之段人別改を可請事

附寺院之儀は其本寺より末寺に紛無之段証文可差出候旦又古切支丹類族の者死失出生縁組仕候ゝハ其旨早速可注進事

一 伴天連御高札被仰出候通浦々嶋々に守来候船々迄心を付不審成様子有之ハ早速可注進事

と五人組の告発連帯責任等を明かにし人別改寺請証文死失出生縁組（切支丹類族）の届出義務を負わしている。この五人組帳は毎年役人によって村人に読みきかされ其の周知徹底が期せられたのである。この後宗門改めが実施されたのであろうが、この状況については若年の頃県の御土資料が雑誌新教育かで山田孚之丞先生の書かれたおあらための行事と面白く拝見した記憶がある。

五人組帳は年数回、藩によっては毎月の延もあったようで、踏絵等宗門改めは正月の月一回行なわれたようである。

庄屋の家に村方一同集り、役人檀那寺の和尚それに庄屋や村役人の前で、書役の役人に一人一人呼び出され、

「何兵衛家内（人数を答える）宗門寺は――」

と簡単な調べであるが、緊張した村人は何回となく練習したにかかわらず、よく失敗して冷汗をかいたとか。

四神藩では踏絵が厳重に行なわれたようであるが、佐伯ではどうであったであろうか。

このような厳しい取締りによって跡かたもなくなったであろうキリシタンの遺跡遺物の調査が、最近会員諸兄の手によって調査されつつある事はうれしい限りである。更にこの事については故老の思出話や、資料口碑の拾集と併せて遺跡遺物の調査等によって、十名にあまる火罪者をさえ出した佐伯切支丹の背後をはっきりさせたいものである。

（終）

覚書

続猪留垣物語

―観見半島の防壘について――

会員　山本保

佐伯湾の南側に突出した鶴見半島（現在の鶴見町――旧東中浦村、旧中浦村）に猪垣（ししがき）が残存しています。

既に、佐伯豊南高等学校市野瀬に教諭が「猪垣物語」

――鶴見半島の話題あれこれ――（佐伯史談第十三号）ハ研究を発表されていますし、また、大阪市在住の木田長氏（鶴見町吹浦出身―旧西中浦村）も卓見を述べられています。

わたしも、昭和十四・五・六年（三年間）当時の丹賀寿常高等小学校に勤務して、猪垣を通った経験がありますので、私見を申し上げます。

この猪垣については、明治十四・五年頃（一八八一、二年）南海部郡長斉藤利明が、猪害を防ぐために当地方の住民に築造させたという見方と、もう一つは安政二年（一八五五年）築造という見方の二つに分れています。

木田長氏は、

瀬戸内海にも猪垣に類するようなとりでがあります。鶴見町の猪垣は、明治時代築かれたとの事ですが、果してそうであったかどうか疑問に思います。小さな部落であのような工事が出来るものでしょうか。何れにしても礎石があったのを更に利用したのではないでしょうか。土地の人もそう言っているのを聞いたことがあります。

と見解を発表されています。

問題提起の意味で左に資料を掲げます。

（第一資料）

歴史年表

年号	西暦	事項
文化五	一八〇八	間宮林蔵、間宮海峡発見。
〃七	一八一〇	伊能忠敬佐伯の沿岸測量
〃一一	一八一四	中野山中に火薬庫を造る。
文政八	一八二五	外国船打ち払い令出る。
文政一一	一八二八	シーボルト事件。
天保二	一八三一	青木種比古生まれる。
〃三	一八三二	毛利高泰（十一代）継ぐ。
嘉永五	一八五二	佐伯藩清国船と長崎に譲渡。
〃六	一八五三	黒船来る。白潟弾倉製造場失火。
安政元	一八五四	下田、函館開港（日米通商条約により）。
〃二	一八五五	とりで（猪垣）築造
〃五	（一八五八）	各国と通商條約を結ぶ。
万延元	一八六〇	桜田門外の変
文久二	一八六二	寺田屋騒動。生麦事件。
〃三	一八六三	幕府より海防令出る。女島沖洲に砲台を築く。
		西谷小路及重空蔵下に火薬製造所築造。
		上久部四山にて大砲鋳造。
元治元	一八六四	池田屋騒動、長州征伐。
慶応二	一八六六	薩長密約成る。
〃三	一八六七	青木種比古暗殺される。
〃四	一八六八	年号を明治と改元す。

寛政四年、高山彦九郎正之が佐伯を訪れ、家老桂五郎令と会見をしています。

文化七年、幕府方高橋作左衛門以下伊能勘解由（忠敬）、坂部貞兵衛など十七人の役人が沿岸測量の為に佐伯に来藩しました。毛利高誠（第九代）侯は、この一行に佐伯半紙を進呈しています。

嘉永六年、白潟弾倉製造場より出火して、死者五人、役人いに金五人分が賜わり、弔っています。

安政三年、龍護寺磧で英式訓練の閲兵式が行われています。

文久二年五月、砲台を久部村と向島に築造しました。

然し久部村の大砲は鉄を用いて一射しましたが、炸裂して使用不可能となり、向島のものは銅を用いて皆完用されています。同年八月西谷小路の製薬所が発火して、生徒関仙十郎外四人の従人が死亡しています。同年十二月大庭空蔵下の火薬製造所が発火して、黒田潤吉氏と、流谷節二郎が重傷を負っています。

以上、徳川末期にかけて、毛利藩がいかに国防に腐心していたかが窺われます。

（第二資料）

鶴見崎海軍望楼

「危巖として鯨波汪洋たる海面を抜くこと数百尺、峭崖嶄然雲を凌いで高く中天に聳ゆる延、巍然一宇の高楼の峙つを見る。是即ち鶴見崎海軍望楼なり。煉瓦を以て築き地盤より高きこと二丈三尺、牖戸を排して双眸を放てば四方空濶、千里眼を極む。中国の山、四国の海、皆翛然として眉宇の間に在り。而して港波縹渺天を焦がす。太平洋は遠く南にひらく。あお艦艦十万波を蹴って東海に向こうの日、打電一振警を内国の要地に伝うるもの只真に夫れ此の望楼なるか。」

右は作者不詳なれど鶴見崎望楼の一節である。望楼は戦前の海軍人耳目だった。沿岸の要地、岬角、孤島に設けられて沿岸を監視、敵の動静をさぐりて警を全国に伝える。日清、日露両戦役では最も重要な存在であった。

飛空機やラジオの発達と共にやがて無用の長物となり自然消滅の結果となった。然し当時此の方面唯一の軍事施設であり、呉鎮守府の所轄で国防上重要な地位を占めていた。平時は精密な気象の観測を行ない、航行の船舶に、種々の監視と注意を与えていたのである。

（第三資料）

丹賀砲台

佐賀関に司令部のあった大豊豫要塞に所属していた丹賀砲台（所在地鶴見町丹賀）は昭和二年当初台動を始め、同八年試射するに及んで、豊後水道全域要塞地帯という鉄のベールに掩われ、四十三サンチ榴弾砲二門、太平洋方面に備えて物騒千万だった。以来十余年間、世界の動きは険しく、満洲事変、支那事変、太平洋戦争、そして終戦と破局の道を辿った。

昭和十六年、常勝日本帝国の誇りに熱狂したるも束の間、狩され気味の戦局を反そかに憂え始めた昭和十七年一月十一日、ここでの実弾発射演習中、突如一方の砲身が破裂し、十七名の将士が即死するという一大異変を生じた。

時の情勢に鑑み、現地修復を改めて、鶴見崎に新しく十二吋砲四門の据え付け工事を始め、昼夜兼行、総力結集の下、敵艦来襲に備えて岩壁を穿って上部を遮蔽し、遂に完工。そしていよいよこれからという時に、昭和二十年八月十五日（終戦）が来てしまった。

敢えてこの砲台だけではない。あらゆる軍事、国防、戦争関係の人も施設設備も一切がその姿をなくしたのだから致し方がない。勤労奉仕隊の勤力、徴用工員の決死的な大動員も、思えば何という悲しい無駄であったことか。

第二、第三の資料は平田章一先生の編著から抜萃いたしました。

恵えば文化・文政・天保・弘化・嘉永・安政・万延・文久・慶

態・明治・大正・昭和の時代を通して、鶴見半島が軍事上（陸海軍）の要地だったわけです。外敵を防ぐために、とりで（通称方里の長城）が佐伯藩の命令によって築造され、その時に巌石ができたものでしょう。そして、このとりでは、明治十四、五年頃、猪垣に修築、利用されて現在に至ったものだと推察されます。

「猪留垣」の歴史的由来、それが持つ地域の特殊性、社会的立場、そして日本の動向について考察を試みました。

先輩諸賢の方々の御批正を仰ぎたいと存じます。

（おわり）

書翰

お召艦を迎えた日

宮崎県日向市美々津町在住
佐伯市出身
賛助会員　狩生秋仙氏より（編集者記）

（掲載許諾）

啓上　御便り拝見、お送りしました古文書（附記）がお役に立ちます由、何よりと思います。

「佐伯史談」第五十一号も、興味深く拝見いたしました。小生在竹時代、竹田から高千穂、阿蘇盆地一帯を遊びました人で、高木先生の探訪記も面白く拝見した事でした。尚高千穂高校の沢氏は延岡商業に在任中、補導主任で、小生は富高の補導部長として、年に三回は県北補導協議会で連絡を持ち合っていた方、同校の校長は小生と共に富高に十年間一緒にいた人、世の中は広いようで狭いものだと心から思っております。

さて、御同封戴いた「佐伯郷土史年表」ですが、これを見ているうちに小生は思い出した事があります。そこで小一時間ほどかかって、古い日記を探し出したのですが、同冊子の「大正時代」、大正十四年の下段（郷土）の欄が幸いにブランクになっています。若し補正でも役立ることがありましたら、そこを埋めてほしい事項があるのです。その為に古い日記を探し出したのですが、当時書いた通りに写してみます。

七月十七日　水曜・摂政宮殿下御召艦長門にて、戦技御観覧の為佐伯湾行啓・第三皇子高松宮殿下御召艦扶桑にて全上（前八時半御入港）・前十二時少し前伊東のおぢさんが来られて、豊州新報社からの電話であるが、貴方に此度の十二時の上りで大分へ行ってくれないか、との事に、豊州支局に行って見る。用事は本日の摂政宮お召艦のお写真を、夕刊に間に合う様、大分の本社へ届けてくれとの事。承諾してお金四円を貰い、その足で小野写真館に行って写真を受取り、廿分しかないので直ぐ俥を走らせて駅に向い断くにして間に合う。大分着三時。降雨の為俥にて豊州新報本社に行き写真を渡して、大分発下り三時五十七分にて帰る。

写真と書いていますが、本当は、ガラスの種板を現像したばかりで、まだ濡れたままの物でした。これが大正十四年のことです。

大正十年の八月には、佐伯駅ホームで東郷元帥をお迎えしたこともありました。十一年の日記を見ても書いてないところを見ると、十一年だったと思います。小生は十一年から日記を書き続けていますので。

くだらぬ事を記しましたが、御参考になるものならと思いまして。

尚五月定例現地研修会によりますと、丹頃―振寄―